

鑄物業同族団の技術的系譜関係

岩手県奥州市における水沢鑄物の事例

東海大学 高木俊之

1 目的

この報告は、岩手県奥州市に現在も存続する鑄物業の系譜関係を辿ることで、工業における同族団理論を補強し、その有効性を確かめようとするものである。

同族団とは、中野卓の研究を要約すれば、それは家族とも親族とも異なり、それは「家」を単位とし、「家」の性格の展開によって生じた系譜的な家々の連合体のことである。その独特な性格は、それが父系的親族と必ずしも一致するとは限らないことで、そこには血縁のない奉公人養子や住込みの使用人も構成員に含まれる(中野, 1956:69-70)という。非血縁の者も含む本家・分家の系譜関係が同族団の要素ならば、それに類似した関係は、呼び方は違えども日本の各地に存在していた。ゆえに同族団研究の考え方や方法は村落においてだけでなく、二次産業、三次産業の分析にも応用可能なのである。そこで、1947年～50年に調査された埼玉県川口市の「鑄物の町」調査や、1953～1954年に行われた九学会連合の能登調査(武田・中野・外木・安食・間, 1955:433-450)は後年、「国産の同族理論が援用駆使された」(稲上, 1987:7)と評価された。特に、工業における家の系譜関係は能登調査に示されている。石川県鹿島郡能登部町においては「マツイ」が同族団と同じ意味を持ち、その内外で「ヨボシオヤ・コ」という一種の親子関係が機業の存立の基礎に横たわっていることが明らかになった。能登調査では、家の系譜と機業の関係が明らかにされているが、技術の系譜について考察がされたわけではなかった。そこで工業にも同族団が存在するならば、技術の系譜関係も視野に入れる必要があると考える。

2 方法

水沢鑄物工業協同組合編『南部鉄器のふるさとキュポラ・浪漫 炎の象徴・鉄器が生きている町・羽田』(水沢鑄物協同組合, 1990年)および小林晋一『水沢鑄物発展史考(上・下)』(非売品, 1971年)に掲載されている系譜の意味をききとり調査によって明らかにした。

3 結果

地場産業における技術は、師弟の系譜関係の中で、マニュアルにはできない独特の微妙な勘やコツが伝承される。そこで水沢鑄物製造業者の系譜をモデル化し、図1として示す。血縁のない弟子を系譜に含めている。

4 結論

同族団研究は、「歴史社会学的研究の対象となりつつある」(中野, 1974:300)とされるが、地場産業、伝統産業において同族団理論はまだ有効である場合も存在することを指摘する。

文献

稲上毅, 1987, 「概説 日本の社会学 産業・労働」稲上毅・川喜多喬編『リーディングス日本の社会学(9)産業・労働』東京大学出版会:3-23.

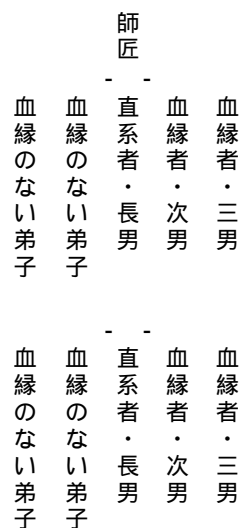
武田良三・中野卓・外木典夫・安食正夫・間宏, 1955, 「『織物の

町』能登部 その社会構造」九学会連合能登調査委員会編『能登 自然・文化・社会』平凡社:418-450.

中野卓, 1956, 「事業主の系譜と性格」尾高邦雄編『鑄物の町 産業社会学的研究』有斐閣:65-107.

中野卓, 1974, 「同族」フランク・B・ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典(13)』TBSブリタニカ:300-303.

図1 血縁関係と師弟関係をあわせた系譜モデル



資料: 千田泰司氏からききとって作成